JIM-NET便り

2012年６月20日（水）

特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
〒171-0033 東京都豊島区高田3-10-24
第二大島ビル303 ☎03-6228-0746

写真左：
DOMIZキャンプのクルド系シリア難民（1）

NEWS

特集：「シリア危機と難民」 ……P.1～2
第11回JIM-NET会議
1.医師からの報告……P.3～4
2.看護師からの一言……P.4
事務局長中東レポート：
ヨルダンから考えた原発……P.5
福島からこんにちは……P.6
北海道でイラクと原発を考える……P.7
イベント報告：アースデイ福島……P.7
鎌田代表のつぶやき……P.8
局長くん第10話……P.8

特集：「シリア危機と難民」

佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

6月20日は世界難民の日だ。
イラク戦争では、400万人を超える人たちが家を失った。
日本でも、地震と津波、福島第一原発事故で、避難生活を送っている人は33万人。今まで支援する立場だったのが、支援される国になった。
昨年の2月から悪化したシリア情勢、周辺諸国へ避難する人たちは、23万人（毎日新聞3月13日）にのぼる。私たちの活動拠点であるイラクにも難民が流れ出した。
故郷を失った人々へ、今度は私たちに何ができるのだろう。

●ヨルダンにあふれるシリア難民

ヨルダンのシリア難民は、10万人を越えている。しかし、難民登録を済ませたものは9500人で登録待ちが4000人。難民キャンプがあるわけではなく、アンマンやマフラクといった都市でホテルやアパートを借りて自力で生きていかねばならない。3万人は最低限の支援が必要だという。

国境の町、ラムサは、シリアの激戦地になっているダラーから5kmほどしか離れていない。闇で国境を越えてくるシリア人を受け入れているのが、シャバーブシャというビジネスマンが解放した5棟のアパートで、ヨルダンの当局が厳しく管理している。ほとんどのシリア人はパスポートも持たずに逃げてくる。ヨルダン人の身元保証があれば、ヨルダンでの滞在が許される。私が訪問すると、建物の外で、多くの人たちが話し合っており、何かを訴えたいのかわさわさと集まってくる。建物の中には着の身着のままで逃げてきた人たちがいた。15畳ほどの部屋に20人が雑魚寝している部屋や、トレーラハウスに寝ている人もいる。私が昨年、石巻に入ったときには、まるで、戦場のようだと感じたが、今度は逆に、避難所の体育館を思い出す。一日400人から700人が国境を越えてくる。

「昼間はシリア軍が見張っているので、動けません。夜、200人くらいが集まって、50人くらいの自由シリア軍がエスコートしてくれ、歩いて国境を越えました。」パルチザンのようだ。映画「サウンドオブミュージック」のナチスドイツからの逃亡シーンが思い浮かぶ。そして、福島の人たちが、周りから非難されることを恐れ夜こっそりと家を出て行くという話とも重なった。

首都アンマンでは、タクシーの運転手が話しかけてきた。
「私の家の周りにも、シリア難民が何人かいて、何も持たない、食べるものにも困っている。かわいそうなので支援しているんです。見てほしい。そして少しでも慈悲を」と訴えられた。ルッツフィーさんは、60歳くらいで見るからにハッジ（メッカ巡礼を済ませた好々爺）といういでたちだ。町内会で、古着とかを集めては、シリア人たちが住んでいるアパートにもって行く。25人くらいが支援対象になっている。15日前にやってきた家族は、「ビルの建築をやっていました。ホムスでデモに参加したら、警察に逮捕された。43日間、腕を縛られてつるされて殴られた。脱臼したところが癖になっている」別の男性は、シリア兵に銃剣で腹を刺されたという傷跡を見せてくれた。携帯に入っている動画を見せてくれる。「親戚だ。拷問を受け戻ってきた遺体を確認している」そばにいた子ども達も一緒に覗き込む。
「6部屋に10家族が住んでいます。ここは、家具も何もないんです。ガスがあるのはこの部屋だけ。」
「この人の夫は、怪我した人を手当てしていたら撃たれて死んだ」
別の部屋では、妊娠中に国境を越えて逃げてきた若い女性が流産してしまい、マットレスに横になっていた。多くの女性は、むしろ話すことで気を紛らわせようとしていた。一方男たちの目は、恐怖と不安で沈んでいる。

DOMIZキャンプのクルド系シリア難民（2）

●イラクにできた難民キャンプと閉鎖された難民キャンプ

私たちが活動しているアルビルから100km北上したドホークには、難民キャンプが設営されている。DOMIZキャンプだ。すでに、3000人を超える難民が到着している。
クルド自治政府のIDP refugeeコンサルタントのムーサさんは、白髪の老人で、ゆっくりと威厳のある英語で説明した。
「ドホークは、サダム政権崩壊後のイランやトルコからの帰還難民と、2006年ごろからバグダッドやモースルなどの治安悪化で多くのアラブ人が逃げてきている。私たちは、彼らが差別されないで、社会に復帰できるよう躍起になっているというのに、今度は、シリア難民だ。もうテントは見たくない。悲しくなる。」IOMは、あと数ヶ月で7000人に達するのではないかと見ている。大変なことが起きている。
4月15日、アルワリードキャンプが閉鎖された。イラク戦争後迫害を受けるようになったイラク国内のイラン難民や、パレスチナ難民が暮らしていた。閉鎖というと聞こえがいいが、約300人が残されたまま、UNHCRとイラク政府の契約期限が切れてしまった。キャンプの青年アザッドとバグダッドで会い話を聞いた。「電気も、水もこなくなった。<JIM-NETが支援した>クリニックも軍が使っていて僕たちは追い返される」というのだ。それで、治療が必要な患者をバグダッドまで運んできたという。なんていうことだ！UNHCRが撤退したって？300人も残っているのに？アザッドは、イラク戦争時は、18歳だった。9年間の砂漠暮らしで、ろくに教育を受けるチャンスもなかったせいだろうか。落ち着きがなく、順序だって旨く話ができないこともたびたびだ。私たちもいらいらしてくる。しかし、アザッドがしゃべらないと誰もキャンプのことを知ることもないのだ。「僕たちのことを見捨てないで欲しい」アザットが悲しそうにつぶやいた。それは、石巻や福島の人たちが言っていたのと同じ言葉だった。
毎日のようにアザッドが電話してくる。お金がないからワン切りだ。かけなおすと「キャンプの8歳の子どもが腎臓がわるい。病院に連れて行くお金がない。車をだしてほしい」という。
「わかった。心配するな」

DOMIZキャンプのクルド系シリア難民（3）

＊JIM-NETでは、今まで関わってきたアルワリードキャンプの難民や、シリア危機の拡大が活動地域に影響することを想定した「難民支援募金」を呼びかけています。詳しくはHPをご覧ください。

第11回JIM-NET会議報告

井下俊（JIM-NET医師）

JIM-NETの活動目標の一つは、イラクの小児がん患者の生存率を日本の治療成績に少しでも近づけることである。そのために感染予防や看護師研修など行なってきた。はたしてJIM-NETの活動は、イラクでの小児がんの治療成績向上に寄与できているのだろうか。それを検証するために、毎年イラク全土の小児がん専門医からデータを持ち寄って頂き、医学会形式で発表を行い、治療成績の解析と今後の課題の検討を行なっている。今年も2月にアルビルでその会議を行った。

（イラク各地から医師が集まったJIM-NET会議）

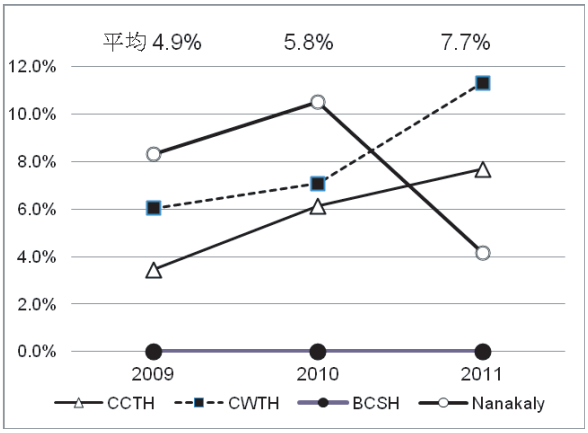
【ALL治療早期の問題点（早期死亡と治療放棄）】

イラクの急性リンパ性白血病（ALL）の治療の問題点は、治療開始１ヶ月以内の死亡率が高いことであった。日本では2%未満であるが、2006年以前のイラクの治療成績では優に10%を超えていた。つまり治療を開始しても１ヶ月を越せない患者が10人に一人以上のリスクの高い治療となっていた。JIM-NETは、治療早期の死亡率を低下させようと、抗生物質を中心とした薬剤の配給や血液バンクの補助などを行なってきた。そのかいあってか、2009年の早期死亡率は平均で5%程度まで低下し、格段の進歩を示していた。治安の安定とともにさらに早期死亡率が減少していくことが期待されていたが、各病院間でばらつきはあるものの、2011年の結果では平均で7%以上に悪化していた（グラフ）。早期死亡率の悪化している病院によると、治療成績悪化原因として、患者の多さによる医師の疲弊を挙げていた。例えば最も早期死亡率の高かったCWTHでは、一年で100例以上の新規ALL患者が登録されている。この数は、十分な人員と資材のある日本のがんセンターであっても混乱をきたす数であり、患者一人ひとりを注意深く観察し、適切な治療を行うことはできない。治療成績を上げるためには、十分な数の血液専門医の育成が必要である。

早期死亡率の高さと並んで、イラクの小児がん治療の問題点として治療を拒否する患者の多さがあげられる。2009年はALLの新規患者の6.6%が最初から治療を放棄し病院を去っていくという悲しい事実があった。つまり15人に一人の患者が、治療の機会を与えられないまま自宅に帰り、そのまま息を引き取っているのだ。日本では起こり得ない悲劇である。残念ながらこの数は減少しておらず、2011年も新規ALL患者の6.5%が治療を放棄していた。その原因に関する議論からは、″遠方″の″貧困家庭″の患者に治療を放棄する率が高いことが示唆された。今後JIM-NETとして治療放棄を予防し、すべてのALL患者に治療の機会が与えられるような活動ができないか、準備検討中である。

【ALLの中長期（1年以上）治療成績の推移】

JIM-NETは2004年以来、8年以上支援活動を継続している。バグダッドの2つの病院（CCTH、CWTH）とバスラの病院（BCSH）とは、JIM-NET設立以来ずっと関係を維持しており、そのために正確な長期フォローのデータ解析も可能となった。
表に示すようにこれら3つの病院で、無病生存率（再発がなく完全治癒が期待される状態で生存している率）は2006年から着実に改善している。とくに2006年と2009年の3年間での成績の向上は劇的なものがある。2年無病生存率で見ると、CCTHで40%近く、CWTHでは14%、BCSHでは25%程度の生存率向上が得られた。ただしイラク人医師たちによると、この間の治療成績の向上は、治療手技の進歩よりも治安の改善が影響しているとのことである。2006年はイラク戦争後治安が最も悪化していた時であり、定期的通院に支障をきたし多くの患者が治療を継続できずに再発したそうだ。今では少なくともそういった治安状況の不安は、皆無ではないのだが解消され、継続した治療が可能となっているとのことであった。



グラフ；4病院における治療1ヶ月目の死亡率の推移
CCTH;子供中央教育病院（バグダッド）
CWTH；子供福祉教育病院（バグダッド）
BCSH；バスラ子供専門病院
Nanakaly;ナナカリ病院（アルビル）

【これからが正念場】

イラクの政治状況はまだまだ不安定ではあるが、2006年の最悪の治安状況は抜け出し、病院へのアクセスは保証され、最低限の医療を受けることがやっと出来るようになった。それ故に2006年から2009年にかけては劇的な治療成績の改善がえられた。問題はこれからである。治療早期の死亡率は、2009年から2011年にかけては悪化しており、日本の治療成績にはほど遠い状況は続いている。それをいかに向上させていくか、今後の活動によりJIM-NETの真価が問われるであろう。

CCTH	1 年 (%)	2 年 (%)	3 年 (%)	4 年 (%)	5 年 (%)
2006 (n=39)	41.0	25.6	23.0	20.5	20.5
2009 (n=25)	68.0	64.0	-	-	-
2010 (n=50)	76.0	-	-	-	-
CWTH	**1 年 (%)**	**2 年 (%)**	**3 年 (%)**	**4 年 (%)**	**5 年 (%)**
2006 (n=94)	56.4	50.0	46.7	44.5	42.9
2009 (n=116)	64.7	64.0	-	-	-
2010 (n=114)	69.3	-	-	-	-
BSCH	**1 年 (%)**	**2 年 (%)**	**3 年 (%)**	**4 年 (%)**	**5 年 (%)**
2006 (n=47)	47.9	41.6	39.6	37.4	37.4
2009 (n=33)	78.8	66.4	-	-	-
2010 (n=41)	68.2	-	-	-	-

表；3つの病院における、無病生存率の推移

JIM-NET会議に参加した 看護師からの一言

赤尾和美（アンコール小児病院看護師）

昨年11月に初めてアルビルのナナカリ病院を訪れ、院内感染対策に関わり始めた私は、まだまだイラクに関わる未熟な疑問でいっぱいだった。その様な状況下、2回目のアルビル訪問では、JIM-NETに関係する医師らが大集合するJIM-NET会議に参加。しかも1日遅れの参加であり、″まずは、状況を把握しなければ！″と、11月の印象を確認するように、じっくりと参加者のプレゼンテーション、ディスカッションに聞き入った。そして、各病院からのプレゼンテーションを聞きながら、まとまりのなかった頭の整理を始めると、おぼろげだったものも見えてきた。

まず、院内感染対策に関するイラク人スタッフの意識である。11月の訪問時には「スタッフの意識はばらつきがある」という印象であったが、ナナカリ病院スタッフに対するサーベイの結果からは、単なる″お利口さん″な回答ばかりではなく、比較的冷静に自らの行動や意識を捕らえていることが分かった。またバグダッドの病院からのプレゼンテーションでは、本来、公表したくはないであろう写真も用いながら、感染対策の改善の必要性、重要性が参加者へ投げかけられた。

予想以上に意識が高いことが確認されたが、ここで新たな疑問が生じる。つまり、意識レベルは悪くないが、実行されない・・・のはなぜか？この疑問は、今回に限ったことではない。″分かっちゃいるけど、やめられな〜い！″という歌せりふにもあるように、頭で理解することと実際の行動変容に至るまでには、時間がかかるものである。これが、2009年から2011年の治療早期の死亡率が悪化している一つの要因でもあるかと思う。井下医師が言う‘正念場’を乗り越えるには、感染対策の徹底は最重要事項の一つとなる。

もう一つ見えてきたものは、井下医師からも言及されているが、治療拒否の患者数の多さである。貧困問題がその原因となることが多いとの見解に、病を治すだけの医療提供では足りないことが伺える。医療従事者教育に″病″を診るのではなく、″その人″ ― 家族、環境、宗教、文化など患者さんを取り巻く、たくさんの因子を持ち合わせた一人の人間を総合的に診ることができる医療従事者の育成と、またソーシャルワーカー、カウンセラー、プレイ・セラピストなど専門職の養成、訪問看護のようなアウトリーチ活動が今後の課題となるかと思われる。

以上あげた2点が成果を収めるのに不可欠なのは、″チーム･ワーク″である。個人プレイでは、成し得ない。チーム・ワークを構築するのにネックとなる要因が多々あるこの国において、どのようにアプローチすればよいのか・・・と悩む。イラクはサッカーが盛んな国である。ナショナル･フットボールチームにその秘訣を聞かせていただきたいものだ。

事務局長 中東レポート ヨルダンから考えた原発

佐藤真紀（JIM-NET事務局長）

ヨルダンは、現在96%の電気を海外からの化石燃料に頼っている。これではいけないと、2019年には、最初の原発を稼動し、2035年までに4基の原発を建設し、60%の電力を創出する計画だ。第一基目の原発をどこが受注するかに注目が集まっている。入札に参加しているのは、ロシアとカナダ、そして三菱と仏アレバの合弁会社だ。日本は、原発輸出を国是として掲げてきた。中東で原発建設の計画が盛んになって来ている。しかし、UAEでは、日本は米国と組んだにもかかわらず、韓国に持っていかれた。ヨルダンは落とせない。そんな時、福島原発が事故を起してしまった。それでも、政府は、原発を売ろうと躍起になり、原子力協定を結んだ。野田総理は、「ヨルダンの話は既に進んでいる（政府間で署名済み）。これから新たに原子力協定を結ぶ場合は、福島の事故を考慮し慎重に考える」と述べており、日本の技術が安心であるという検証も、説明もなされていない。ヨルダンは7月には最終的に発注先を決定するという。果たして日本は落札できるのか。 原発の予定地となっているマフラクという町を取材した。ヨルダンの首都アンマンから北東に50km、車で一時間もかからない。シリアへ向かう街道沿いにあり、最近はシリア情勢の悪化により避難してくるシリア難民があふれているという。地元で原発誘致に反対しているという団体「アリハムーナ」のターリクさんに話を聞いた。ターリクさんたちは、原発が誘致されることを聞いて、2011年2月に反対運動を始めた。最初は6人だったが、今では3600人の仲間達がヨルダンにいるという。

「マフラクの住民は全員が原発誘致に反対しました。最終的には国王がやってきて、話を聞いてくれた。そして、マフラクの住民が厭なのなら原発はここには作らないといってくれた。そして、一ヶ月半くらい前に政府は正式にマフラクに原発を作ることを断念したのです。」住民運動の勝利だ。

「アリハムーナ」のターリクさんと佐藤事務局長

–反原発を掲げて、ヨルダン政府の圧力はないのか？

「内務省も、警察も、国会議員も味方してくれた。現在ヨルダンの国会議員は、120人いるが、63人は原発に反対している。原子力委員会のハリッド・トゥッカーンは、フランスのアレバとの結びつきが強く、もうけようとしているが。国王は、この問題に関しては、中立を保とうとしていて、国会などの民主的なプロセスをあえて重んじている。公式には、原発に、賛成、反対は表明していない。」

–ヨルダンでは原発を受け入れると、地域にお金が落ちるというような話はないのか

「そんな話は聞いていない。日本ではそんな事があるのか？」

–なぜ住民運動が勝利したのか–

１．すべての議員に意見書をだして、関心を持ってもらった。
２．マフラクの人たちと勉強会、説明会を根気よくやってきた。そしてポスターを作って町のあちこちに貼った。
３．警察に行って、私たちが原発に反対していることを訴えた。
４．すべての環境団体、人権団体などにも協力、連帯を求めた。
５．メディアに取り上げてもらった。
６．政府の説明会や勉強会には、必ず顔をだして、反対を訴えた。

日本大使が現場を視察しに来た事があった。25人のマフラクの人たちが集まってきて、日本語で、原発反対と書いた紙を持って訴えた。大使は、どうして、自分達の視察をマフラクの人々が知っていて、しかも日本語で訴えてきたことにびっくりしていた。
やはりこのように私たちの運動が盛り上がったのは、福島の事故が大きかったと思う。

Facebookに記事を書くと、多くの人たちがコメントをくれたことも勇気づけられた。

– マフラクには原発を作らないことが決まった。アリハムーナとして次の計画は？

「政府は原発そのものを諦めたわけではない。カラックの近くのコトラーネという場所が次の候補になっている。我々は、コトラーネの住民の反対運動を手伝う。」

–日本に向けたメッセージを

「福島で起こったことに私たちも深い悲しみを感じています。日本の皆さんは、落ちこまないで欲しい。あなたたちは、経験が多く、みんなで協力することでこの困難を乗り越える事ができる。ヨルダンと日本は、今まで強く結びついてました。マフラクという小さな町にも、日本からボランティア（青年海外協力隊）が30年も来てくれています。私たちに出来ることがあれば協力したい。そして、原発が、私たちの自然や、生活を壊していくことを、ぜひとも阻止しなくてはいけないし、日本とヨルダンの人々の関係を壊して欲しくないのです。」

4月20日　マフラックで佐藤が聞き取り

福島からこんにちは

小松真理子（JIM-NET福島プロジェクト担当スタッフ）

福島からこんにちは！はじめまして、4月よりJIM-NETチームに参入しました、福島プロジェクト担当の小松真理子です。いま、JIM-NETではあたらしい福島支援の一環で「放射能リテラシー向上プログラム」を実施しています。「放射能リテラシー」とは、放射能がどのようなものなのか、どうすれば被ばくを最小化できるのかといった知識と、日々の生活における放射能に関する意識のことを指していて、この2つの向上が、こどもたちも含めた皆の健康を守っていくために必要だと考えています。

具体的に福島県内では、2種類の活動を展開しています。一つは、独自に放射能測定をおこなっている数々の市民グループを対象とした測定者スキルアップ研修とネットワーキング、そしてそれぞれの測定所から見える地域課題に応じた、広く一般向けの講習会の開催です。

ひとつめの測定者研修について、これまでもいくつかの放射能測定所について、ブログなどでご紹介してきました。福島県内各地の測定所のメンバーは「食べ物の安全を確保したい」「できるだけ線量を下げて暮らしてゆきたい」という思いは共通ですが、小さな子どもの親御さんや、有機農家さん、孫に自家菜園の野菜を食べさせるのが趣味だったシニア世代と様々です。3・11以前は「放射能」に関わることのなかった人々が、かなり専門的な知識と技術を必要とする放射能測定器を使いこなすこと、また測定所を市民で運営してゆくことは、決して簡単なことではありません。JIM-NETでは、約20の市民測定所を訪問し、それぞれに異なる課題やニーズをうかがって、必要に応じて専門家による研修や質問セッションを設けたり、測定所間の情報共有につながるネットワーキングの機会を提供したりしています。日本第3位の広大さを誇る福島県内の移動には骨が折れますが、行く先々でお会いする方々の生活者としての覚悟と熱意に日々感動、ご一緒できることに感謝しています。

いろはに放射能測定所

ふたつめの一般市民への公開講座は、市民測定所から挙げられてきたいくつかのテーマについて、地元の人々と専門家が集って語り合い学びあう機会として企画しています。5月には内部被ばくについて知る会を開催しましたが、これからも、放射能に負けない食生活についての研修会、農業者と流通者そして消費者の意見交換会などを各地で開催してゆく予定です。またそこで、今の福島で生活をつづける人々の声を集めて、県外に住む人々と共有してゆきたいと思っています。

第１回放射能リテラシー講座

JIM-NETの福島プロジェクトには、このほかに福島県内外・国外の様々な団体との取り組みもあります。5月19・20日には、空中線量の高い福島市内でこどもたちが思いっきり屋内で遊べるイベント「アースデイ福島」が開催され、JIM-NETも写真展やワークショップブースで参加しました。来たる6月24日には、福島県内でも線量の低い猪苗代で屋外遊びをメインにした「アースデイ猪苗代」に参加します。また次回、JIM-NETブースについてご報告しますね！

アースデイ福島に参加するボランティアたち

北海道でイラクと原発を考える

大嶋 愛（JIM-NETスタッフ）

4月14日、『平和学校2012　STOP！PKO！』に佐藤事務局長、『さっぽろ自由学校「遊」2012年度オープニングイベント』に大嶋を、それぞれ呼んでいただきました。札幌には「イラクチョコ募金の会」というJIM-NETの強力なボランティアチームがあり、道内の店舗やイベントなど足繁く回ってくださっています。なんと今年は2300個も引き受けてくださいました！この会のおかげで札幌にはサポーターがとても多く、いつもお世話になっている方たちへ活動報告をしてきました。

翌4月15日は泊村まで足をのばし、2週間後に止まれば、日本の原発が全停止になる泊原発3号機を対岸から見学。そして、イラクチョコ募金の会のメンバーも参加する「電気の道をさかのぼる札幌～泊100km ピースウォーク」のゴールの応援に行ってきました。5日間歌って踊り続けたという、まさにピースなウォークでした！ゴールでは原発依存の見直しを求め、原発停止後も再稼働しないよう、参加者全員のメッセージを北海道電力の社員へ手渡しました。

海や山に囲まれた、本当に自然豊かなところに泊原発はあります。「トマリ」はもともとアイヌ語です。アイヌの人々の土地を切り崩して作られたのです。豊かな生活を求めるあまり、たくさんの犠牲を生んできたことや、イラク戦争も原発も、多くの人の反対があるのに行われてしまうことに、実はどうすればいいのか少し放心状態でした。

しかし、北海道でたくさんの出会いに恵まれ、「人のつながりがパワーを生み、社会を変えるんだ」と、ひしひしと感じました。

来年でイラク戦争から10年という節目の年です。原発事故のこともすでに風化され始めているように感じます。戦争と放射能に関わってきたNGOとして、今こそネットワークをうまく使い、イラクも福島も忘れ去られないようにしたいと思った旅でした。

ピースウォークに参加したメンバーたち

【イベント報告】 アースデイ福島 ～ぼくらがつくる あした～

小林浩之 / 大嶋 愛（JIM-NETスタッフ）

5月19･20日、福島市でアースデイ福島が開催されました。これは、震災や原発事故で大変な思いをしてきた福島のおとなたち･子どもたちが、アースデイ（地球の日）にちなんで環境のこと、防災のこと、自分たちの心やからだのことなどを楽しみながらあらためて考える時間を持ち、元気に明日に向かって歩いていくために、国際協力NGOセンター（JANIC）や福島で活動するNPO/NGOのメンバーが実行委員となって企画されたものです。JIM-NETからは福島プロジェクト担当･小松が準備から現地で関わっていましたが、イベント当日は東京からも応援に駆けつけました。

お天気にも恵まれた当日、放射線量の問題もあるため屋内３か所での開催でしたが、2000人以上の方が来場されました。被ばくを避けるため外で遊べずストレスをためている子どもたちに楽しんでもらえるようにと、おもちゃ交換会、スタンプラリーなど様々な催しがありました。JIM-NETは特に子どもたちに放射能について学んでもらえるよう、『イラクと福島の子どもたち写真・絵画展』、『おしえて　きみがしってる「ほうしゃのう」のこと』（子どもたちに放射能について知っていることを書いてもらうコーナー）、『万が一カルタ』（万が一、原発事故があった時にどうしたら良いのか学べるカルタ）のコーナーを開設しました。また被災地支援を行い東北のまちの物語を集めて紙芝居にしているボランデポ広島の「福島まちのものがたり紙芝居」が来てくださったり、サイエンスライターの山田ふしぎさんの持ち込み企画「日食グラス作成」をお手伝いしたりと、スタッフ全員大忙しでした。夜の交流会「おとなアースデイ」では、NGO関係者でありプロのアーティストでもある人々のライブ（大嶋も歌いました！）や、高校生が中心のダンスグループの発表など本当に盛りだくさんな2日間でした。

避難を勧める人も、残りながらも被ばくを防ごうとしている人も、福島は大丈夫と言う人も。それぞれの意見を尊重しつつ福島のあしたを一緒に作ろう、と集まった人々の間に団結の力を感じました。みんなで「福島のあした」を考えることができたイベントでした。

福島まちのものがたり紙芝居の上演風景

鎌田代表のつぶやき。。。

東北支援のチャリティーコンサートが、渋谷のオーチャードホールでおこなわれた。石巻で津波に流されたグランドピアノが血のにじむような努力で再生された。そのピアノを歌手のクミコが弾いて、この日のために書きおろした詩を、ぼくが車イスで朗読した。

＜忘れない＞

年老いた漁師がつぶやいた
オレなあ、家も船も流された
家族を失った
海が憎い
でも誰か船を貸してくれたら、海に出る
海はこわいけど、海が好き
2011年3月、忘れられない海になりました

若いお父さんが津波で行方不明の小さな息子を
命がけで捜す
朝早くから夜遅くまで、1年が過ぎた
心の切りかえなんてできっこない
どうして、子どもを救えなかったのかと、
いつまでも自分を責めるだろう
2011年3月、忘れられない悲しみになりました

大津波のあと、何度も雪が降りました
放射能を含んだ雪が、草や森や街を汚した
真白い雪に
ガイガーカウンターの音が不気味に響く
美しい里山が悲鳴をあげる
汚れてしまった悲しみに立ちつくす
2011年3月、忘れられない雪になりました

1986年チェルノブイリ原発事故がおきた
放射能汚染地、
埋葬の村で老人から聞いた
「天国はいらない、ふるさとが欲しい」
すべての人間に
ふるさとが大切
2011年3月、ふるさとを忘れないと心にきめました

15歳の女の子がぼくにきいてきた
私、大人になって結婚して
赤ちゃんを産むことができますか
見えない放射能におびえている
大人の責任だ
君のふるさとをきれいにしてあげたいな
2011年3月、忘れられない重い約束になりました

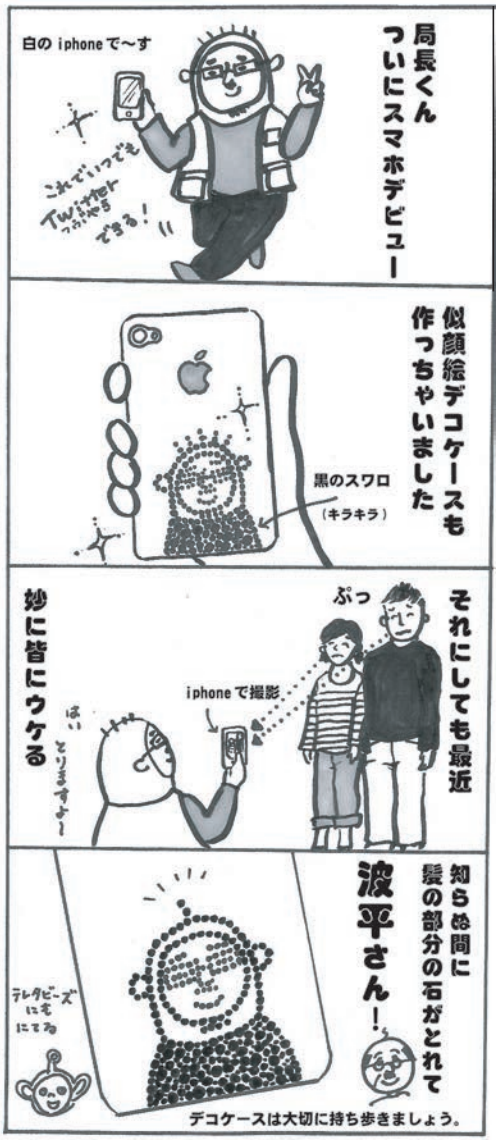
一人の人がいたら、声をかけよう
朝は必ず来ます。
あと3時間で太陽があがる
弱い人に手をかしてあげてください
あと1時間で日が昇ります
寒い、寒い、肩を寄せ合いましょう
2011年、3月12日未明、一緒にいることの大切さを忘れません

津波は家や車や街や、命を奪っていった
それでも、翌日、太陽はあがる
東北の人はあったかい
よく来たな。食事は食べたか。泊まる所あるか
残酷な3月は絆の3月になりました
2011年、辛い辛い3月を忘れません。

2012年初夏
津波で壊れたピアノが復興して
こんなにステキな音色を出せるようになったことを
いつまでも、いつまでも
忘れません
きっと、つながる！
ぼくたちは必ず復興する
信じている

局長くん 第10話

高橋マリモ



【編集後記】

先ごろ話題沸騰した金環日蝕、皆さまはご覧になりましたでしょうか。東京では、流れる雲にはらはらさせられながらも、神秘的な太陽のリングを見ることができました。宇宙の法則と自然の摂理の下、一介の人間として謙虚な気持ちを取り戻す一瞬でした。今年は希少な天文現象が続くようですが、ひとつひとつ、大きな単位で物事を考え直す機会にしていきたいです。

JIM-NET便り 2012年 6月号
発行: 特定非営利活動法人
日本イラク医療支援ネットワーク
発行日: 2012年6月20日
〒171-0033
東京都豊島区高田3-10-24 第二大島ビル303
info-jim@jim-net.net ☏03-6228-0746